鳥取県立博物館研究報告 Bulletin of the Tottori Prefectural Museum 46: 73-87, March 30, 2009

資料紹介 Data

興禅寺（鳥取市）の天井画について

山下真由美[1]

Paintings on the ceiling in Kozen-ji Temple, Tottori city

Mayumi YAMASHITA[1]

キーワード：興禅寺、天井画、鳥取藩、御用絵師、池田家、菩提寺、黄檗

はじめに

鳥取城東の栗谷（現鳥取市栗谷町）に、鳥取藩池田家累代の菩提寺であった興禅寺はある。黄檗宗の寺院である本寺は龍峯山と号し、創建は天正12年（1584）に遡る。萩毛利家の東光寺、仙台伊達家の大年寺とともに黄檗三叢林の一つに数えられ、寺領二百石、格式待遇はすべて領内寺院の上位を占めた[i]。本稿では、往時の興禅寺の姿を垣間見ることのできる、数少ない貴重な作例である御霊屋の天井画168面について、その内容と写真を掲載し、本天井画の記録としたい。

一　興禅寺天井画について

興禅寺は、美濃岐阜城下（現岐阜県岐阜市）に天正年間に創建された龍峯山広徳寺に始まるが、池田家の転封により三河、播磨、備前と転々とし、最終的に寛永9年（1632）の岡山池田家との国替えに伴い因幡へと移った。翌年には寺領二百石が与えられ、三院の塔頭を始め、禅堂なども整備されて、その規模を徐々に拡大した。しかし享保5年（1720）と、続く同20年に火災に遭い一山焼失、その後、文化9年（1812）7月12日に鳥取城下の大半を焼き尽くす大火の炎上を免れるも、その翌日に同寺客殿の茅屋根からの出火により全焼している。いずれも再建が果たされたが、明治に入り池田家との仏縁の絶たれた後は、堂宇の維持が困難となり、その大半を解体、今に遺るのは御霊屋を改造した本堂と、庫裡の一棟のみとなっている。このたび紹介するのは、当時の御霊屋の御霊壇と御高間にあたる、本堂最奥の格天井に残された168面（172図）の天井画である（図1a・1b）。

現在の本堂は、文化年間の再建後の様子を示す「興禅寺惣絵図面」（図2：鳥取県立博物館蔵）にみる御霊屋の配置や規模とほとんど変わらず、手前から御拝ノ間、御次ノ間、御高間、御霊壇と続く。御高間は御次ノ間より床の高さが一段上がり、天井は格天井となっている。最奥の御霊壇は、壇上に本尊の 釈迦 如来座像を始め、羅漢立像等が安置され、天井は折上格天井となっており、支輪はゆるやかなS字を描く。

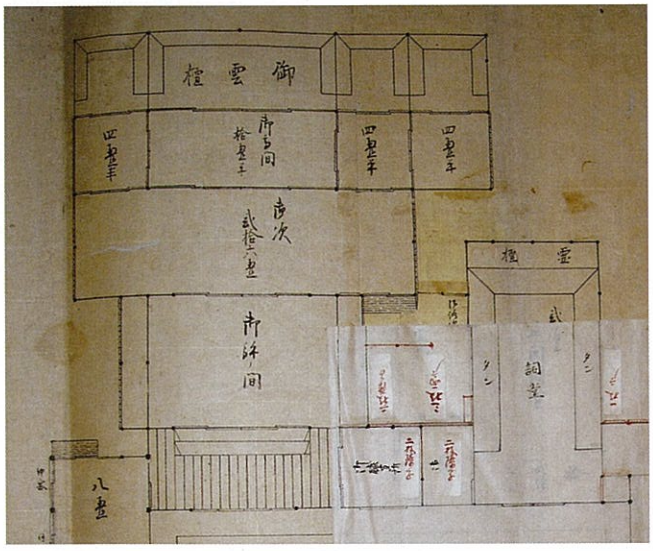


図2. 興禅寺惣絵図面（部分）

御高間・御霊壇の両格天井は、それぞれ縦6列、横14列に黒漆塗りの梁で分割され、各格間にはそれぞれ異なる絵が紙に描かれている。紙はひとまわり大きな板一面につき一枚貼られており、各板は室内からは見えないが格縁の上に載り、釘で固く固定されているようである[ii]。御霊壇の折り上げている支輪部分の四

[1] 鳥取県立博物館　〒680-0011 鳥取市東町2丁目124
Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan
E-mail: yamashita-ma@pref.tottori.jp
[受領 Received 2 December 2008 / 受理 Accepted 5 January 2009]

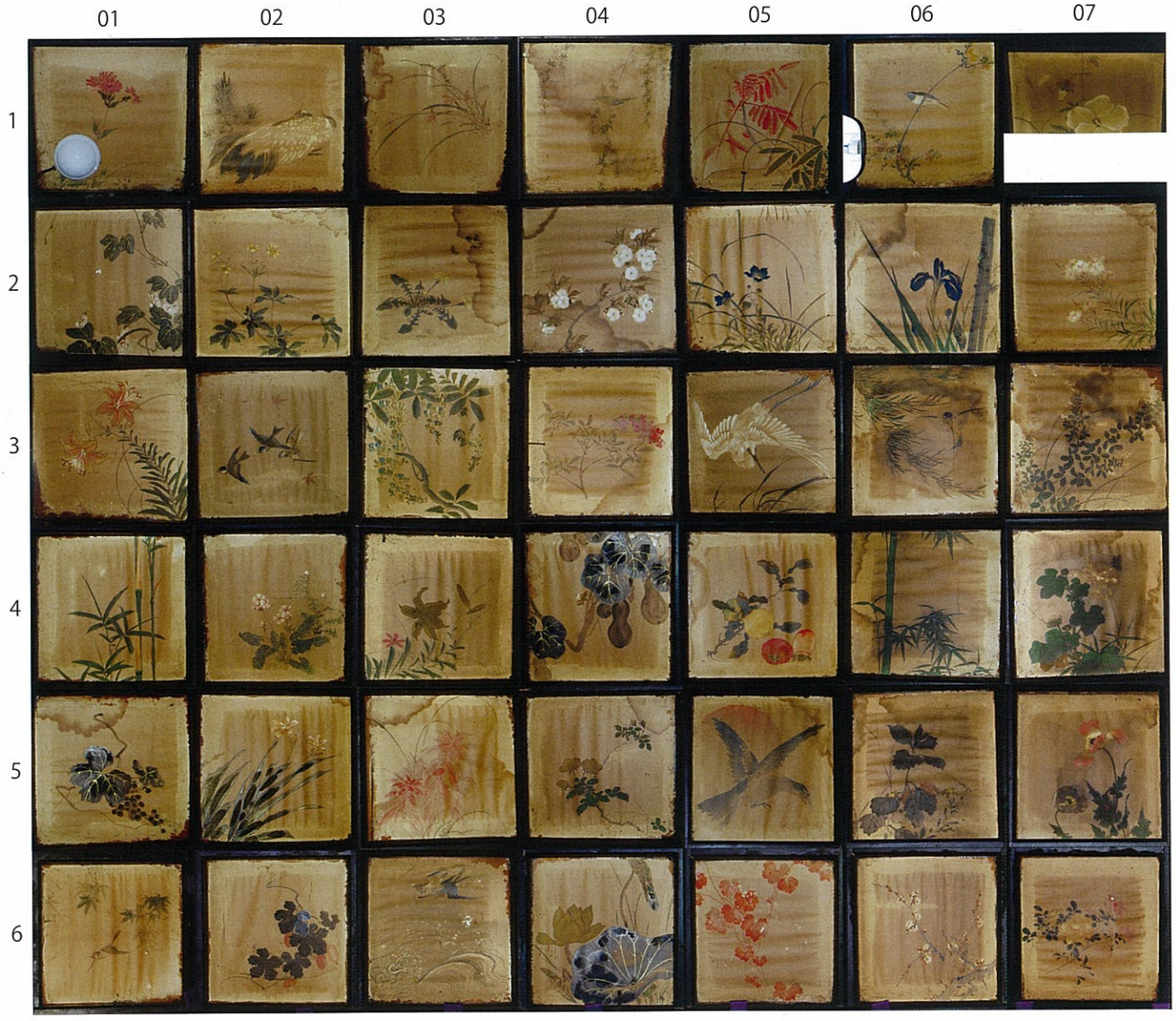
図 1a. A 御霊壇

 ©鳥取県立博物館 Tottori Prefectural Museum

（注：各格間は見やすいように適宜向きを回転させている。）

 ©鳥取県立博物館 Tottori Prefectural Museum

図 1b. B 御高間



 ©鳥取県立博物館 Tottori Prefectural Museum